

ティーチング・ポートフォリオ

山村学園短期大学子ども学科 / 子ども学科

講師 酒井 誠

1. 教育の責務

2020年度の担当科目は(表1)の通りである。

科目名	開講年度	学期	対象学年	種別	受講者数	備考
図画工作	2020	前期	1年生	演習	24名 24名 25名	3グループ
造形表現の探究	2020	後期	1年生	演習	24名 24名 25名	3グループ
ナチュラルアート	2020	前期	2年生	演習	16名	選択希望者
子ども文化演習 B 劇	2020	後期	2年生	演習	68名	4クラス 教員3名
総合演習	2020	通年	2年生	演習	68名	4クラス 教員4名
スキルアップセミナー	2020	通年	2年生	演習	68名	4クラス 教員4名
乳児小児救命法	2020	後期	2年生	集中	未定	希望選択者 教員1名 インストラクター -3名(予定)

(表1) 2020年度 担当科目詳細一覧

2. 教育の理念

図画工作や造形表現の授業では、制作のための単なる技術的な指導ではなく、学んだ技術や活動を活かし、いかに子どもたちと知識や体験の共有が行えるかを実践的に学び、多角的な視点を身につけることが求められる。

教科書などの資料などから学ぶことも数多くあると思うが、実際に体験することにより教える際のコツや、危険などを事前に配慮する能力などを養い、教育者としての最低限の知識を養う。

3. 教育の方法

(1) 図画工作

図画工作の授業については、まず、基礎的な技法の習得から始まり、身の回り個々の柔軟な発想、更には周囲における様々な配慮を培うことに対して重きを置いている。基礎的な技法習得に関しては、絵の具やクレヨンの使用方法(絵の具の混色、クレヨンと絵の具の複合技法)等行う。次にハサミや糊の使いかた、様々な素材の基礎知識など、現場に出た時に、不自由なく教えることができるよう実践的に教育を行う。どの時間に対しても成功体験や失敗体験を実感させるように努め、個々が行った行動がどう良かったのか、どう悪かったのか、意識的にしっかりと認識させ、成長を促せるよう、コミュニケーションをしっかりと行うことを心がけている。

標準的授業進行

毎回の授業レジュメとなるプリントを配布し、口頭でのレクチャーを踏まえ、文章によって内容理解をさせる。

レジュメを読み上げながら口頭で説明し、図解などを板書して要点を示す。学生たちの見える場所で実際の制作過程を実演し、文字では理解が難しい部分の内容把握を徹底する。

学生の理解と意欲を確認して、終了時間を把握させ、個々に制作ペースをイメージさせながら制作活動に入る。

教室内を巡回しながら、個々にアドバイスと、質問に応じる。少しでもイメージに違和感のある生徒には綿密なアドバイスを施すように心がける。

完成した作品を鑑賞しながら、良い点(学生の様子を見極めながら良い点と改善方法を個別に指摘する。)を評価する。

(2) ナチュラルアート

ナチュラルアートの授業では山村学園短期大学敷地内にあるたくさんの自然を使用した授業展開をおこなっている。2年生の選択科目ということもあり1年次の図画工作、造形表現の探究では学ぶことのない、一步踏み込んだ創作活動をテーマとして行っている。身近ではあるが専門的な知識を使用し、使い方によっては子供達相手でも大人相手でも楽しめる授業を作り出せる可能性を秘めた課題授業を全3テーマで行なっている。

1つ目は風船を石膏で型取りし、卵のような物体を制作し、それを各々思った形に割る。できた形に校舎内で集めた草花を押し花にし、それを卵型の物体の表面に装飾的に貼り付けていく。完成した物体の中に電飾を施し、作品を完成させる。

2つ目は、校舎内にある木の枝や落ち葉、木の実などを集め、それを各々好きな形に加工したのち、何かしらの生物のイメージに見立て、台座の上に生物標本の形式で作品を制作していく。完成した『空想生物標本』には生き物の名前をつけ、展示を行う。

3つ目は感光性のある特殊な溶剤を作り、それを塗布した紙などに、校舎等から採取してきた葉や花などを置き、太陽光に晒すことでその形が紙に焼きつく、サイアノタイプと呼ばれる古典技法を用いた授業を行った。

これまでの3つの課題を行うことで、校舎内の草木や陽の光、風土を活かした作品作りも行えるという概念を身につけさせることを行った。

(3) 造形表現の探究

造形表現の探究の授業では、図画工作の授業とは違い、仲間と協力し、一つの作品を作るといったグループワークに近い物を主軸にし、授業展開を行っていく。図画工作で学ぶ制作への基礎的な理解を基に、グループワークによる協働でスケール感のある大胆な表現ができるようにしている。

また、制作や遊びを自分自身で考え展開できるようになることを目標にしている。個人としての制作が主な図画工作との内容の違いはあるが標準的授業進行は概ね同じであるが、個々で動く作品制作と、グループで動く作品制作の場合、どのような違いがあり、更には注意点や楽しめる点など、図画工作での授業を踏まえながらの授業展開を行っていく。

昨今の新型コロナウイルスの関係もあり、生徒との距離感や感染対策も踏まえながら教育を行っていけるように心がける。

(4) 乳児幼児救命法

この授業の目的は、乳幼児の保育現場における事故防止と、緊急時に医師や救急隊に引き継ぐまでの応急手当を習得することにある。子どもの緊急時とは、生命の危機が迫っている場合、重い後遺症が残る可能性がある場合（脳障害や頸椎損傷等）である。これら緊急時の優先順位に基づき、実際のステップに沿って内容を進める。開講時期を卒業年次生が就職を控えた1月の集中講義にすることで、実際の保育を意識した学びになるようにした。

授業内容は〔事前指導〕で受講の方法と心構え・保育園、幼稚園での子どもの事故の事例を挙げ、その法的な責任などについて学び、受講の前後での認識の違いを〔事後指導〕で確認できるようにしている。〔中間試験〕は1、2日の講義内容と実技の認識度を計るための試験を実施する。〔事後指導〕全過程について3日間に分けて振り返りを行う。

授業	期 日	時 限	授 業 内 容
1	1 / 16	3 限	事前指導・受講の方法と心構え、事故等の事例
2	1 / 29	1 限	こどもの事故の現状、応急手当とは、医師や救急車への連絡、当初の観察と接触、生の徴候の調査、反応のない子どもの手当、心肺蘇生法 など
3	1 / 29	2 限	
4	1 / 29	3 限	
5	1 / 29	4 限	
6	1 / 30	1 限	
7	1 / 30	2 限	
8	1 / 30	3 限	
9	1 / 30	4 限	
10	1 / 30	5 限	中間試験
11	1 / 31	1 限	生物によるけが、子どもの虐待、災害時の注意、心肺蘇生実技 など 実技・認定試験
12	1 / 31	2 限	
13	1 / 31	3 限	
14	1 / 31	4 限	
15	1 / 31	5 限	事後指導（まとめ、レポート）

参 考

(2018年度・実施日程)

担当教員と3名のインストラクターが協働して最大50名の指導に当たる。実際の保育現場での事故を想定した内容を重視し、従来の心肺蘇生方や除細動器の使用法に加え、事故発生時の初期判断(通報)、怪我への対処、止血方法、異物除去の方法を映像を交えた講義により概要を把握する。その後、2人1組の実習によって体験的に学ぶ。また、乳幼児突然死症候群について学ぶ。

いずれの実践も幼児、小児に特化して学びの意味を明確に伝え実際の保育を意識した学びになるようにしている。今年度は新型コロナウイルスの関係で一部授業変更が行われる可能性があるため、そちらも考慮しつつ授業を行う。

4. 教育の成果、評価

2020年度の前期定期試験前に教員による授業参観を行い、自身の授業の客観的な評価を得た。

以下、教員に本学教員による参観記録になる。

(1) 図画工作

・これまでの授業で習得した技法を使って、CDでコマを作るという制作を行っていた。技法のみならず、それを生かした遊びに転換している内容となっていて、保育にもつながる授業内容だと感じた。2年間の学びは短い、保育現場につながる表現系の授業の内容を考えたり、授業間の連携を図り学びが繋がって行くことや、内容重複などの時間の無駄なく学べることが重要だと改めて感じる。しかし、保育者自身の感性を磨くという点では、アートという視点で様々な活動を行う意義も大いにある。本学の学生の性質も鑑み、何をどのように教授していくかを考えることは遊んで学ぶの具現化・創造につながると考える。

新しい生活様式という点では、図画工作分野は個人の集中の中にある遊びも多いので、比較的対応しやすい分野であるかと考える。お道具袋が一人一つあることも道具の共有を必要とせずに良い仕組みだと思う。

・本時の授業テーマは、「CDコマを作ろう」で、参観時はコラージュやデカルコマニー、パチック、スクラッチなどの図工の基本的な技法を使って、CD(ディスク)を使って華やかなコマを賑やかに作っていました。

まず、CDコマの意匠に学生達の自由な創意工夫を引き出せるように、教員が各種の技法に必要な材料や道具等をあまねく周到に準備している点は参考になりました。また、授業のレジュメに、活動(授業)のねらいが「これまで学

習した技法が上手く活用できているか、一手間加えることにより、新しいものを作れることを知る」などと明記してあり、このことで学生にとっては学びの焦点化が容易になり大変良いと感じました。

(2) ナチュラルアート

・『石膏でランプ作り』制作する題材や素材などがよく考えられていると感じた。作品はとても素敵で、制作中の学生も集中していたのと、楽しそうな表情が印象的だった。作品の豪華さから制作工程の難易度が気になったが、作り方を伺うと、小さな子どもたちと一緒に作れそうな感じで、自分でも挑戦したい気持ちになった。

また、酒井先生が、学生ひとりひとりに声掛けをしながら作業工程のアドバイスをしており、学生も相談しやすそうに感じた。

作品選びや工程、学生が今後この授業の内容をどう発展させていくのか等、共通する部分が多いのでとても勉強になった。

(3) 授業参観記録からの考察

以上の授業参観記録から自身の授業における考察を行っていく。授業の事前準備や授業計画に触れている点が多く、自身の授業テーマとして、分かりやすく、学生がこれまで学んだことを活かせるような授業を行っていくという点においては、ある程度は達成できたのではないかと感じられる。他にもコミュニケーションを綿密に取り、学生個々の良さを引き出す事、及び、学生の授業内で抱える学びの進捗状況や不安などもある程度は行えたのではないかと感じる。

ただし、今年度は新型コロナウイルスの関係もあり、授業内での生徒間の距離感などをもう少し検討する必要があったのではないかと考えられる。座席はもちろんのこと、授業課題の選定及び、授業中の学生間のコミュニケーションについても課題が残るのではないかと思う。記録にもある、お道具箱がひとつひとつ用意されているというものは昨今の状況からしても、とてもプラスになる事ではないかと思う。事前に感染対策も行い、各自が楽しく作品制作及び学びの場が展開できたら良いと感じる。

5 . 教育の改善に向けた今後の目標

(1) 図画工作

・ 短期的目標

話し方やそのスピード、ジェスチャーも取り入れながらの、より良く理解が及ぶ、視覚的・感覚的にも理解のしやすい授業への改善を行う。

資料などの配布物の見易さも考え、誰が見ても分かり易い資料作りを行う。

短期的に成果が出つつも、しっかりと技法理解が行える方法や教え方を研究開発する。

・ 長期的目標

ものつくりを嫌いにならない、誰もが楽しんで作品制作を行えるよう、教育環境及び指導方法の教育研究を行う。

教えた技法や方法論から、生徒達自ら新しい技法を生み出し、楽しく授業展開が行えるよう、その手がかりになるための授業を行えるようにする。

良質なコミュニケーションを取ることを心がけ、生徒達の不安や疑問などを常に汲み取れるよう気配りを徹底する。

(2) 造形表現の探究

・ 短期的目標

グループワークが多いため、屋外でのレクチャーの仕方等、立ち振る舞いや話すスピード、声の大きさ等、よりよく相手にイメージを伝える事を心がける。

子どもの絵の発達については、実際の絵を見つつ、資料としても理解のしやすいものを用意し、臨場感のある授業展開を考える。

・ 長期的目標

感覚で動作を行ってしまう学生も多いが、自らが教える立場になった際は考えて行動しなくてはいけなくなる。そのため、なぜこの動作が良いのか、悪いのか等、行動原理の理解と立ち振る舞いの把握を徹底し行動するのと同時に、危機管理に対しても理解できるよう授業展開を行う。

日頃からコミュニケーションを個々に取り、学生個々の授業の把握状況を認識しておく必要がある。

6 . エビデンス一覧

- (1) 各科目シラバス (図画工作、造形表現の探究、ナチュラルアート、乳児小児救命法)
- (2) 授業時配布プリント (図画工作、造形表現の探究、ナチュラルアート)
- (3) 試験問題 (図画工作筆記試験、造形表現の探究筆記試験、ナチュラルアート筆記試験)
- (4) 授業参観記録